

■いわて自然ノート

発見の連続！岩手県の植物相調査

専門学芸員 鈴木 まほろ

■『岩手県植物誌』について

『岩手県植物誌』という本を御存知でしょうか。1970年（昭和45年）に岩手県教育委員会が刊行したものです。当時、岩手県内に生育することが知られていた維管束植物（種子をつくる植物とシダ植物）のすべてについて、その特徴や県内の分布などが一種ずつ記述されています。また、岩手県の植物相の全体像と特色を示し、気候や土壌との関連についても解説しています。刊行から半世紀近く経っていますが、現在でも大いに参考になる、素晴らしい本です。執筆と編集を行ったのは「岩手植物の会」という植物研究者・愛好家の団体でした。

こうした植物誌は、世界中で刊行されています。日本には、都道府県や市町村単位の植物誌の他に、英語版の専門的な植物誌「フロラ・オブ・ジャパン」（講談社、1993年から分冊で刊行中）など、日本列島全体の植物相について記したものもあります。

■『岩手県植物誌』改訂のための活動

1970年刊行の『岩手県植物誌』には、岩手県に生育する植物として、2621種の名前が掲載されています。このリストは、1970年以前の岩手に生育していた植物のほぼ全てを網羅したものです。しかし1970年代以降、土地開発や交通・流通の発達に伴い、岩手県には新たな外来種が多く入ってきました。一方、生育地が失われ、絶滅した在来の植物もあります。さらに、この半世紀の間に植物の分類が進み、当時とは異なる名前に変更されたり、新種が発見されたりもしています。

こうした様々な変化を反映させた『岩手県植物誌』の改訂版を作成するという目的で、全県的な植物相調査を行う会が

8年前に作られました。先述の「岩手植物の会」を母体として生まれた「岩手県植物誌調査会」（以下、調査会）です。当館は、調査会の事務局を務めると同時に、主な活動場所となっています。

■岩手県植物誌調査会による現地調査

これまでに調査会が行ってきた主な活動の一つは、全県的な現地調査と押し葉標本の作成です。岩手県では1980年代以降、押し葉標本を作って博物館へ納める人が減ってしまい、標本という客観的な証拠に基づいた植物の記録がとて少なくなっていました。

そこで調査会は、2009年からグループによる現地調査を始めました。月1回、4～6名からなる班を3つ編成し、それぞれが県内のどこかへ車で出かけ、どんな植物が生えているかを調べてリストを作るとともに、標本を採集します（採集は許可を得て行っています）。調査から帰って来たら、みんなで押し葉標本作りです。こうして、これまでに1万点以上の標本を新たに作成しました。また、会員が個人で集めた標本も多くあり、これらを合わせると、新たに収集した標本は約2万点に上ります。

■現地調査によるフォーリーガヤの発見

こうした現地調査により、岩手県の植物リストには新しい種がいくつも加わりました。最近の大きな成果は、イネ科のフォーリーガヤを見つけたことです。

フォーリーガヤという名前は、明治時代にフランスから来日したキリスト教宣教師、ユルバン・ジャン・フォーリーにちなむものです。フォーリーはきわめて熱心な植物採集家でもあり、日本で神父として働きながら、北海道や青森県を中心に東アジアで非常に多くの植物を採集

し、母国へ送りました。フォーリーガヤもそのひとつです。

フォーリーガヤは、国内では北海道と長野県のみで記録されており、多くの植物図鑑にもそのように書かれています。生育地が限られるため、環境省のレッドデータブックでは最も絶滅危険度が高いランク（CR）に位置づけられています。その植物が、岩手県で発見されたのです。

今年の5月下旬、調査会は下閉伊郡岩泉町大川の山の中で現地調査を行いました。後日、採集してきた標本を調べている時、中に含まれるイネ科植物の特徴が、図鑑に書かれたフォーリーガヤの特徴と全く同じであることに気がきました。しかし、様々な文献を調べてみても、過去にフォーリーガヤが東北地方で見つかったという記録は一つもありません。

私は「こ、これはひょっとして大発見?!」とドキドキしながら、慎重を期して、イネ科植物に詳しい神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員の方に標本を送り、確認をお願いしました。この博物館には、北海道や長野県産のフォーリーガヤの標本が収蔵されているのです。



岩泉町で採集したフォーリーガヤの標本。台紙の大きさはA3判。

すると間もなく「これは間違いなくフォーリーガヤです」とのお返事があり、嬉しくて躍り上がりました。

現地でこの標本を採集した人は、まさかそんなに希少な種とは思ってもみず、他の多くの種と一緒にになげなく採っただけだったので、生えていた場所もよく覚えていないくらいでした。そこで私達は7月に再び現地を訪れ、フォーリーガヤを探し出し、その様子を詳しく記録しました。この発見については、植物分類学の専門誌に論文を投稿中です。

■新たな外来種の発見

岩手県の植物リストには、他にも新しい種が続々と追加されています。特に、外来の植物は毎年いくつもの新しい種が追加されます。作物の栽培や酪農畜産、園芸や緑化など、様々な目的で外国産の植物が日本に次々と導入されては、野外に逃げ出し定着しているからです。

オオバコ科（古くはゴマノハグサ科）のセイヨウグンバイツルの帰化（野生化）は、調査会会員である小守一男さんの調査により、日本で初めて確認されました。本種は通常、観賞用・薬用に栽培されるヨーロッパ原産の植物です。小守さんは、この種が岩手郡葛巻町の牧草地の脇で繁殖しているのを発見し、報告しました。

また、日本で久しぶりの発見となったのがゴマノハグサ科のヒナウンランです。これは1993年に千葉県の海岸で発見されたヨーロッパ原産の外来種で、日本では他に記録がありませんでしたが、2012年に調査会が行った海岸植物の調査により、釜石市の海岸で発見されました。そのすぐ後に、当館の近所の砂利道でも見付き、以後は盛岡市内で次第に増えているのが観察されています。



■気付かれにくい存在

地味な姿ゆえになかなか存在が認識されない植物も、採集し標本にしておくことで記録に残ります。北米原産の帰化植物であるイネ科のコネズミガヤが岩手県に生育していることが初めて分かったのは、2011年の冬です。当館に近いダム湖の公園で、イネ科勉強会で使う材料を集めていたところ、見慣れないイネ科の雑草に出会いました。よく調べてみたら、それが岩手県未記録のコネズミガヤであることが分かったのです。しかしその後、当館で収蔵している古い標本の中からも本種が見つかり、コネズミガヤは実は数十年前にはすでに岩手県に入ってきていた、ということが分かりました。

■植物誌の改訂をめざして

博物館は、このように多くの記録とその証拠となる実物資料を日々蓄積しているところです。過去の標本も新たな目で見直せば、また多くの発見があるに違いありません。そこで調査会では、現地調査に加えて、県内の博物館に収蔵されて



左：セイヨウグンバイツル
上：ヒナウンラン

いる過去の標本の調査も始めようとしています。

首都圏と違って人口が少なく、植物分類学の専門家が一人もいない岩手県で、ボランティア活動によって『岩手県植物誌』を改訂しようとするのは、なかなかの難事業と言えます。そこでこれまでの成果のひとつのまとめとして、岩手県産の維管束植物のリストを来春までに公開する予定です。これを手がかりに、さらに多くの情報や標本が集められることを期待しています。身近な植物に興味のある方、野外や博物館での調査活動に関心のある方は、御一緒に調査会の活動に参加してみませんか。

■トピック展「東北の押し葉標本」

12月1日～13日 当館特別展示室

本稿で紹介した植物をはじめ、調査会と東北植物研究会の会員が収集した標本を展示します。

◆関連講演会（兼日曜講座）

12月13日（日）13:30～16:00

講堂 講師：志賀隆氏（新潟大）ほか